

## 人間としての在り方生き方の教育

—カウンセリング・マインドを生かして—

田 中 利 行\*

### 1 はじめに

公民科・倫理のキーワードである「人間としての在り方生き方」の教育を進めるうえで、自分の可能性に挑戦し主体的で意欲的な学校生活を如何に送らせるかが課題となる。また、生徒の自己実現を図る為に、如何に効果的な教育方法があるかを考える必要がそこにある。

そこで、「カウンセリング・マインド」を生かし、個々の可能性としての個性の伸長を図るために「倫理」の授業のあり方について考えたい。特に、知育偏重に陥らない「人間としての在り方生き方」について考えるには、「カウンセリング・マインド」を生かした授業の必要性を感じるのである。そこで「倫理」で、実際に開発的カウセリングの手法の一つであるLAC法(Life Analytic Counseling 生活分析的カウンセリング)<sup>1)</sup>を「倫理」の授業に応用して、その教育効果を探索してみた。

### 2 カウンセリング・マインドを生かした授業の展開

そもそも「カウンセリング・マインド」を生かした授業とは、技術ではなく、授業に望む態度であることを前提とすると、教育相談の手法を単に生かすという場合と区別して考える必要がある。「カウンセリング・マインド」を生かした授業という場合は、生徒と教師との人間関係を重要視し、心の触れ合うことを根幹とした授業が期待される。また、そこには「カウンセリング」の基本関係や態度を大切に授業に望む必要がある。そして、その態度を基に授業場面で実践されたのが、「カウンセリング・マインド」を生かした授業ということが言える。

「カウンセリング・マインド」を生かした教師の授業態度の主なものに、

- (1) 関わりの態度(生徒との触れあい、対話を大切にする。)
- (2) 誠実な態度(生徒に対し親身になり、全ての生徒に気配りをする。)
- (3) 発言の受容的な態度(生徒を自分とは別の人間として尊重し、ありのままに受容する。)
- (4) 共感的理解(生徒が内面から見ているままに、その世界を共感的に理解する。)

などが考えられる。このような態度を生かして授業を展開することである。

このような授業に対する態度の考えは、生徒の全人格による学習、すなわち知識はもちろん感情をも含めた自発的な学習を通してこそ、意味ある学習が促進されると考えられている。

授業には、人間形成を図る目的があり、効果を上げるためには、「カウンセリング・マインド」を生かした授業が大切になる。また、そこでの教育効果を上げるためには、教師と生徒の心理的距離との関係が問題となる。

生徒と教師の心理的距離の接近で教育的効果があげられることが、山口らの研究で明らかにさ

\* 岐阜県立多治見高等学校教諭

れた。<sup>2)</sup>また、その研究の今後の課題に、教師の立場から生徒と教師の心理的距離を変容する要因を検討する必要があることが述べられている。そこで心理的距離の変容は生徒と教師の二者の関係より生ずるものであることを考慮すれば、教師の立場からの心理的距離の変容の促進が如何にされるかが、極めて重要な検討課題となる。

また、教師の指導態度が両者の心理的距離に、多大な影響を及ぼすであろうと考えられる。すなわち、「生徒受容型」の指導態度が顕著な教師との心理的距離は、「教師指導型」の指導態度をとる教師との心理的距離よりも、身近であり親密であることが明らかにされている。

以上の研究結果に基づき、生徒の個々の「人間としての在り方生き方」を指導するにあたり、筆者は、授業の中で開発的カウンセリング<sup>3)</sup>の手法の一つである、LAC法を応用することで、学習の促進と、生徒と教師の心理的距離の接近の効果について研究を試みた。開発的カウンセリングとは、従来のような治療的、予防的カウンセリングと本来異なって、個人が自分自身や自分の環境の範囲以内で、可能な限り自己の力を自主的に伸ばす為の手助けをしてやる企てである。そして、個人や集団の成長を促進する開発的な技法が用いられる。

開発的カウンセリングの一つである、LAC法は、生活の分析を重視し、個々の生徒についての具体的な「在り方生き方」についての指針を得ることができ、授業に応用することで教育的効果が期待できると考えられる。

以上のことから、次のような仮説が立てられる。

#### (研究仮説)

LAC法を授業に応用することで、生徒と教師の心理的距離の接近が図られ、「人間としての在り方生き方」の教育が目指す、生徒の個性の伸長が期待できる。

LAC法を使えば、生徒の現在の生活の実態把握をし援助ができ、学習における適切な人間関係が成り立ち、生徒と教師との間の心理的距離の接近が図られる。すなわち「カウンセリング・マインド」を生かした授業の展開で、個性の伸長が図られ「人間としての在り方生き方」の教育の促進が可能となる。すなわち学習の促進を願うには、指導者の教授法や知識の量、カリキュラムの立案の仕方や視聴覚機器の駆使、利用するプログラム学習や講義の説明の方法、扱う教材の内容などは重要なポイントになるが、特に「人間としての在り方生き方」を考えるために最も意義ある学習の促進の条件は、教師と生徒との人間関係の深まりである。そこでこそ生徒の個性の伸長が図られるのである。

そこで、学習の促進者である教師が生徒に対する接し方、すなわち、生徒と教師の心理的距離の変容が求められる。学習の促進者である教師の生徒に対する態度の変容が図られれば、学習者の態度も好転するのではと考えられる。まず学習の促進者の質、つまり、それらの態度はどうあるべきかについて、ロジャーズ (Rogers, Carl R.)の研究に基づいて考えてみる。

「学習促進者の基本的な態度の基盤となるものは、真実さ (realness) もしくは、純粋さ (genuineness) であろう。」<sup>4)</sup>

すなわち、現にあるがままの存在で、なんらかの見せかけ、もしくは仮面を付けることなく、

学習者である生徒との関係へ入るとき、その促進者である教師は、最も効果的な存在になることができると思われる。

このことは、

「促進者が経験している気持ちは、その促進者に利用できる。つまり、その促進者の意識へと利用できる。」<sup>5)</sup>

すなわち、促進者の気持ちを生かすことができ、それらの気持ちをコミュニケーションすることが可能であることを意味する。それは、促進者が人間対人間の基盤において相手と会いながら、学習者との直接的な人格的な関係へと入ることを意味する。

この観点から見ると、教師は、生徒たちとの関係において、誠実な人間になることができる、ということになる。したがって、もしも生徒の内面の世界をほとんど理解せず、生徒たちや生徒たちの行動が嫌いであるならば、偽りの感情移入であったり、あるいは、心を配っているだけの形式的な関係になるだけで、むしろ、ありのままであることの方が、確かに建設的になり得るのである。

しかし、このことは、言葉で聞くほどに単純ではない。純粹であること、正直であること、一致すること、あるがままであることとかは、自分自身に関してそのようであるという意味である。このような態度に立って、生徒たちが、ただ単に理解され、評価されるのではなく、判定されるのではなく、教師の観点からではなくて生徒自身の観点から、ただ単に理解されるとき、生徒たちが、真価を認められたことをどんなに深く感ずるかを示している。そのようなとき、促進的な態度の基盤は確立するのである。

生徒の実態を把握するときの態度は、以上のことから、促進者である教師のかげりのない誠実さ、ある一人の人間になろうとする意志、その瞬間の気持ちや考えのままであることが必要である。この誠実さが学習者である生徒を大切に、心を配り、信頼し大切にしたことになる。そのようなとき、学習のための雰囲気が高まるのである。

以上のような学習の雰囲気のなかで、「人間としての在り方生き方」の教育の指導としては、生徒の将来の社会生活や職業生活の理解を深めさせ、「人間としてどのように生きることが価値のある生き方か」を問うことを前提としなければならない。しかしながら、人間の生き方には、「こう生きなければならない」と言った、一律の生き方が存在するわけではない。そこで、個々の生き方がどのように展開されるかが問題になってくる。すなわち、人は、一人一人が全て個性を持ち、他には替えがたい存在であり、それを生かすことができる生き方が価値ある生き方となるであろう。

そこで、「人間としての在り方生き方」の指導の一つの課題は、生徒が自己を見つめ、自己の特性を理解して、自己の可能性に挑戦する態度や姿勢を培うための指導・援助をすることである。そのためにも、教師が生徒をよく一人一人見つめ、理解を深化させるとともに、様々な場において、生徒を認め、励ましながら生徒自身の特性を自覚させることが大切である。それゆえ、「人間としての在り方生き方」の教育では、「カウンセリング・マインド」を生かし、自己理解の深化と個性の発見が得られるような授業展開が期待される。

以上において、カウンセリング・マインドを生かした授業の必要性について述べた。次にカウ

ンセリング・マインドを生かした授業が、どのような教育的効果が得られるかを考察してみたい。

### 3 LAC法を授業に使用した教育的効果

#### <方法>

- (1) 授業時にLAC法の説明をして、生活行動分析図を作成する。
- (2) 教科担任へ作成した図を提出し、教科担任はチェックをし返す。
- (3) 次週の授業で、その生活行動分析図を参考に1週間の生活を反省する。
- (4) 新しく作図したものと、先週の自己評価したものを教科担任に提出する。

#### <用意するもの>

生活行動分析計画図、ラベル—縦1.5cm 横3.5cm（一人20～30枚）

|                            |                    |     |
|----------------------------|--------------------|-----|
| N : (Necessity)<br>—必要性—   | 例)<br><br>数学の宿題をやり | N   |
|                            |                    | 100 |
| P : (Possibility)<br>—可能性— | テストにそなえる           | P   |
|                            |                    | 80  |
| M : (Mean)<br>—平均点—        |                    | M   |
|                            |                    | 90  |

(得点は10点刻みで計算する。)  $M = (N + P) \div 2$

第1図 ラベルの見本

#### <展開方法>

##### 第一段階：

現在やるべきことをカードに全部書き出し、そのカードをグループ別に分ける。分けられたカードを必要性、可能性からみて100点満点で何点位になるかを主観的にみて採点する。(N+P)の平均をMとして、M得点の高い順に上から並べ貼る。または、あらかじめ項目を分けておいて印刷された用紙に記入する。

第二段階：

1週間後の授業時に、生活行動分析計画図を使い、先週の行動評価を行う。評価は、生徒自らが行う。授業後、教科担任が回収し生徒の実態把握をするこの時、達成できた課題については、赤のマジックで計画図の所を消しておく。消すことで教師は、生徒に対して誉めてやったり今後の方向付けの為の会話を深める。又、この時の達成感を教師と生徒が分かち事でお互いの人間関係が一層深いものになる。

第三段階：

1週間毎のチェックでできなかったものに対しては、新しい計画図に改めて計画を練り直して書き直す。また、この期間内にできなかった事柄に対しては、原因を考えて、今後の立て直しに役立たせる。特に指導を要する生徒には、放課後か休憩時間に、LAC図を見ながら個別指導をする。

次に、実際授業に使った生徒のLAC図の例を紹介してみたい。初めは、ラベルを書き張り付けていたが、時間の短縮もあって直接に図に記入することにした。(但し、実際のものを構小したものである。)

年 月 生活行動分析計画図 (LAC図) No. 氏名

年 月 日作成

| No-7名<br>得点 | 勉強                     | 達成日 | 部活動                   | 達成日 | 生活習慣                 | 達成日 | 家庭生活                    | 達成日 | 友人関係                | 達成日 | その他                      | 達成日 |
|-------------|------------------------|-----|-----------------------|-----|----------------------|-----|-------------------------|-----|---------------------|-----|--------------------------|-----|
| 100         | 英語の予習をしていく<br>100      |     | 来月の予定表を書き顧問に出す<br>100 |     | テレビの深夜放送をみない<br>100  |     | 親ともう1度演劇について話し合う<br>100 |     | 借りたノートを返す<br>100    |     | 先生のとこへ演劇について相談に行く<br>100 |     |
| 90          | 数学の宿題をやりテストにそなえる<br>90 |     | 部室の掃除をする<br>90        |     | テレビは1日1時間までにする<br>90 |     | 親と喧嘩をしない<br>90          |     |                     |     |                          |     |
| 80          | 化学の問題集を55頁まで終える<br>80  |     |                       |     |                      |     |                         |     | 頼まれたCDを貸してやる<br>80  |     | 本を市立図書館に返却する<br>80       |     |
| 70          | 世界史の年表を暗記する<br>70      |     | 脚本を読み終える<br>70        |     | 朝寝坊をしないようにする<br>70   |     | 部室の掃除をする<br>70          |     |                     |     | CDを返しに店に出かける<br>70       |     |
| 60          | 英語の10回書きを提出する<br>60    |     | 演劇の脚本を書きだす<br>60      |     | 夜1時までには寝るようになる<br>60 |     |                         |     |                     |     | 床屋に行く<br>60              |     |
| 50          |                        |     | 台詞を58頁まで暗記する<br>50    |     | 新聞を毎日読む<br>50        |     |                         |     | 文通相手に手紙の返事を書く<br>50 |     |                          |     |
| 40          | 英語の単語を1日30語暗記する<br>40  |     |                       |     | 学校に遅刻しない<br>40       |     |                         |     |                     |     | 服を買いに店に出かける<br>40        |     |
| 30          |                        |     |                       |     |                      |     |                         |     |                     |     | 写真の現像を出しに行く<br>30        |     |

第2図 個々の生徒にみたLAC法の事例-K君の場合

次に、授業でLAC法を使い得られたと思われる効果を以下に整理してみた。

<授業でLAC法を使い得られた「人間としての在り方生き方」の教育への効果>

- (1) 生活の行動分析—毎日何気なく過ごしていたのが、自分の行動がよく理解でき前向きな姿勢ができるようになる。特に、無気力な生徒の分析をしてみると、大抵は毎日の生活において何気なく過ごしている事が多い。すなわち、日々の生活の行動の分析で、現在あるべき姿の把握ができ、「人間としての在り方生き方」を深く考えられるようになる。
- (2) 現在の生活を重要視—「人間としての在り方生き方」の教育にとって重要なのは、現在の生活を取り上げることが必要だということである。過去とか未来から導入・展開されるものではなく、現在の生活をとりあげ将来を考えさせることが大切である。
- (3) 具体性—生徒は、具体的に今何をなすべきかが分かる。生徒は観念的には、「今は当然勉強しなくてはならない。授業をしっかりとやろう。」と分かっているが、いざやろうとするとなかなか、他の誘惑にかりたてられてしまう。生徒にとって、具体的に現在の生活の「在り方生き方」を示すことなしに、将来在るべき姿としての「人間としての在り方生き方」の教育を語ることは、観念的・形式的な授業に陥り、生徒も主体的に授業に参加できないので指示、指導、助言しても効果は少ない。そこで具体的な生活を取り扱うことで、生徒にやる気がおこる効果がある。
- (4) 数量化—現在、本人がやらなくてはならない（必要性）（重要性）（緊急性）などを考慮に入れて、その中で今、一番やらなくてはならないものを検討する。自己の生活を分析することで、生活の見直しがなされる。数量化は、明確化にも関連する。
- (5) 自発性・自主性の尊重—「人間としての在り方生き方」を考えることは、自分のことであり他人が考えることではない。その点、一方的な指示、命令、強制でなく本人の自発性、自主性が十分尊重されている。真の生活の変化は、他からの強制ではなく、自分自身が気づいてこそ初めて起こりうる。
- (6) 目的の視覚化・明確化—無目標、無意欲な生徒は、今何から手をつけたいかが、やるべきことを書き出すことで、明確化が図られていく。このように、自分の行動に優先順位を付けることで、行動は一層はっきりしてくる。人間の説得効果においては、言葉より視覚に訴えるほうが、効き目がある場合がある。このように、行動を視覚化することで今在るべき姿、すなわち自分の「在り方生き方」が深く意識化される。
- (7) 自己洞察—具体的に行動目標を配分化することで、今自分にとって、何をなすことが一番よいのかと自己洞察ができる。小目標を系統化することで、自己の生活に検討が加えられ自己洞

察が図られる。

- (8) 個別化—人間一人一人において個性があるように行動においても、人それぞれの行動がある。このLAC法は、特に生徒の個性、価値観、興味、持ち味、能力などを尊重し、重要視している。「人間としての在り方生き方」の教育は、個々の生徒の持ち味を将来に生かすことが重要であり、個別化が図られる。
- (9) フィードバックによる確認—定期的な確認によって、自分の在るべき姿の見直しを図る。この時、目的が達成できたかどうかを確認して、不完全な場合には新たな行動の計画を立てる。その都度行動の見直しが図られる。
- (10) 評価による動機づけ—実行された行動を見直す事は大切である。毎回、実行できた項目は、マジックでマークしていくことで、行動が評価され、そのことで成就感が得られる。また、その後の行動にやる気を起こすきっかけができる。また、行動の評価は、将来の「在り方生き方」を考える糸口にもなる。

「カウンセリング・マインド」を生かした授業としてLAC法を使い、以上のような教育的効果が上げられたと思われる。

#### 4 LAC法を「倫理」の授業に応用した結果の考察

生徒は自分の内と外からせまってくる新しい経験の中で、自分の内面を見つめ、納得する自分の生き方を求める。「本当の自分とは何か」と問うようになるのも、このためである。自分自身を見きわめようとする青年は、しばしば、自分の心の内面を見つめて、理想とする自分の生き方と現実の自分とを比べ、そこにあるギャップに気づく。意志の強い自分を求めながらも、現実の自分は簡単に欲望に負けてしまうケースの方が多い。

そこで「倫理」の授業にLAC法を使用し、自己の発見が確認できる機会を設け、回を重ねてみたら、徐々に自分自身の生活を見つめ直す姿勢ができてきた。特に、「倫理」の授業で「人間としての在り方生き方」を考えるにあたって、現実の自己のあるべき姿を知ることは教育的効果が上がると思われる。

また、生きる原理としての自己認識・自己概念が確立されることも、「倫理」の授業での「人間としての在り方生き方」を考える目的にあっていると思われる。

次に、LAC法を使った後、生徒に自由記述法で有効であった点について、感想文を書いてもらった結果をまとめると以下ようになる。

- (1) 自分自身について多面的に知り、理解していくこと。そして、自己の現実をその光の面も影の面も含めて、基本的にはそのままの形で受容していくこと。

(自己評価→自己受容)

(2) 自己防衛的で自己中心的な感情、思い上がりを捨て、現実的で開かれた隠やかなプライドと自信を持つこと。

(3) 自分はどのような在り方生き方をしていけばよいか、といった自己のあるべき姿について、柔軟ではっきりした方向性のあるイメージを持つようになること。

(人間としての在り方生き方→方向性)

(4) 自分自身と同様、他の人も自分のことに一喜一憂し、自分が世界の中心に居るかのようを考え、自分のことばかりにこだわる存在である、ということをよく理解するようになること。

(他者理解→自己理解)

(5) 自分自身は過去から未来へと、一貫して存在し続けるものにせよ、現実存在し機能しているのは、「今」の「ここ」の自分しかない、ということを実感し、理解するようになること。

(今の自分の生き方の実感)

(6) 自分でも頑張る努力すれば、それなりの成果をあげることができる、ということを実感し、理解するようになること。

(自己評価→自己実現)

(7) 絶えざる学習を通じて初めて、自分自身を豊かにし成長させることができる、ということを実感し、理解するようになること。

(8) 嫌いなこと苦しいことから逃げないで、正面から取り組んでいくことにより初めて、精神的な充実感を得ることができる、ということを実感し理解するようになること。

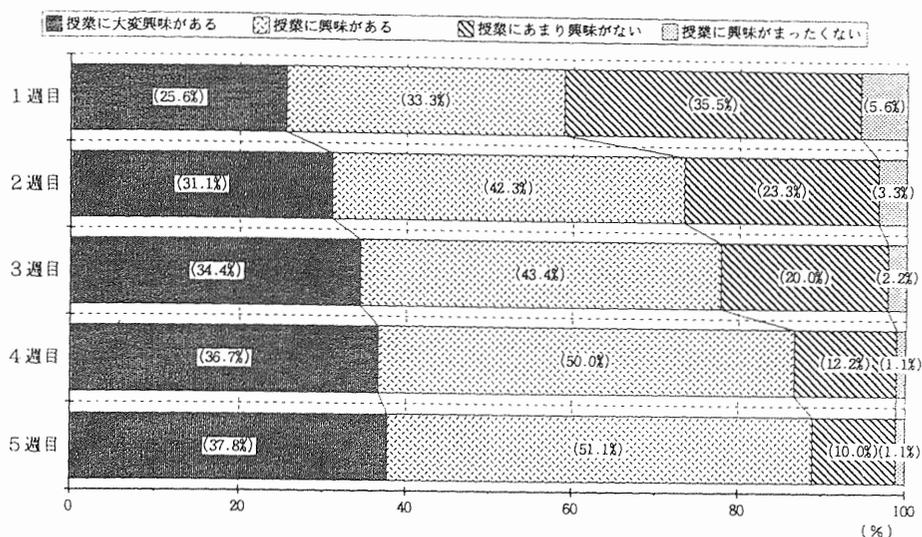
(9) 生涯にわたっての生き方を貫く自己認識・自己概念として、現在の自分を理解するようになること。

(10) 自分の今の生活を、教師に知ってもらうことで、生徒と教師との心理的距離が近くなり、勉強に一層の張りができるようになること。

(自己開示→教師と生徒との心理的距離接近)

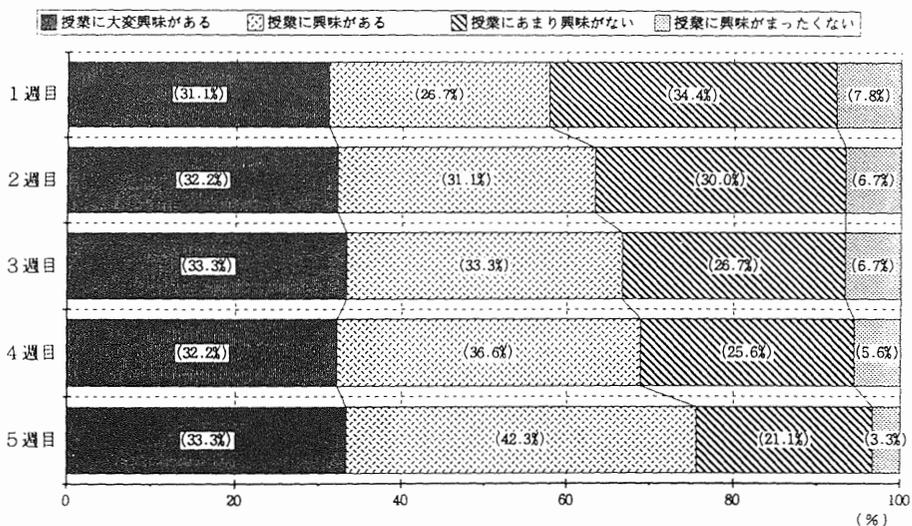
以上のように、「倫理」の授業にLAC法を使うことでの効果が、生徒からの感想に基づいてまとめられた。

次に、LAC法を「倫理」の授業に使った後、生徒が授業に参加する意識をまとめてみた。(無記名調査で実施。期間1993・6～1993・7)

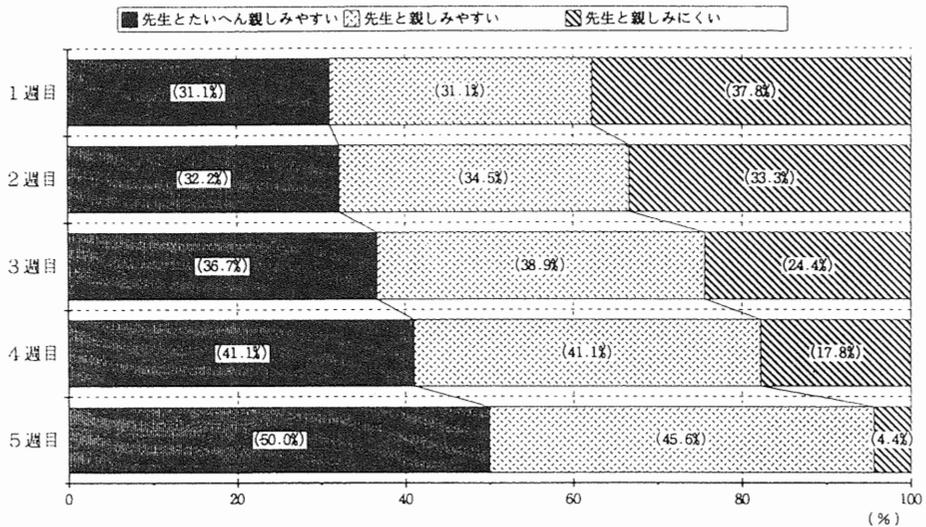


第3図 LAC法を使用した授業に対する生徒の興味の変化

以上の結果、LAC法を授業で取り入れたことで、生徒は自己開示をし、教師は生徒の心的内面性を理解することで、生徒と教師の心理的距離が近くなったことが分かる。すなわち授業で



第4図 LAC法を使用しなかった授業に対する興味の変化

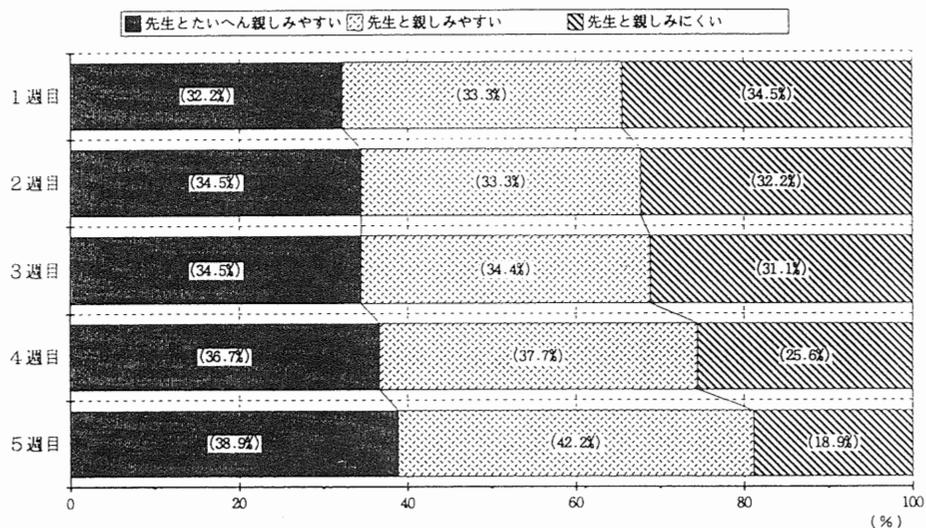


第5図 LAC法を使用した授業での生徒と教師との心理的距離の変化

「カウンセリング・マインド」を生かした結果、生徒は教師に親近感を抱き、授業に対する興味・関心が増加したことが分かる。

教師と生徒との心理的距離を近くし、働きかけることは上述のように望ましいことではあるが、信頼関係が十分に確立されていないと生徒が嫌がるなど、今後の課題でもある。

「人間としての在り方生き方」の教育を進めるにあたって、真の生徒の姿を掴むことは必要な条件である。ややもすると従来の教育は、教師の価値に基づいて教師の一方的な指導が行われて、



第6図 LAC法を使用しなかった授業での生徒と教師との心理的距離の変化

生徒と教師との心理的距離も遠いように思われる。そのためにも「カウンセリング・マインド」を生かした授業の必要性がある。

「カウンセリング・マインド」を生かした授業が、「人間としての在り方生き方」を考える授業になぜ必要なのかを、LAC法を取り入れた授業の実践結果から振り返ってみると、教育においては、生徒自身の内面の世界への洞察と配慮が必要不可欠な条件だからであると思う。

しかしながら、生徒に対して日々働きかけをしている教師は、一人の生徒が独自の内面世界を持つ、という根本的な事実本当に気づいているのであろうか。もし「人間としての在り方生き方」の教育を真剣に取り組むならば、一人一人の内面世界の在り方を無視することはできないのである。教育においてなぜ内面性を問題にしなくてはならないかということ、まず生徒に本当に関わっていかうとするならば、生徒を、その内面から理解しなくてはならない、ということである。生徒を外側から見ているだけでは、自分の思い込みで、その生徒を理解したつもりになってしまう傾向がある。

個々の生徒の「人間としての在り方生き方」を考えるには、個々の生徒の内面世界を対象とした働きかけが必要である。そのためには、個々の生徒の内面世界に教師も至るべきである。それゆえ必要になるのが、「カウンセリング・マインド」を生かした教育である。個々の生徒の内面の世界に届くように、働きかけを工夫するということが大切な課題になると思われる。

また、生徒一人一人が、自分の内面世界を対象化してみる場を設定するということが大きな課題となるであろう。LAC法は、その点、個々の生徒の内面世界を対象化できる利点があると思われる。「人間としての在り方生き方」の教育にとって的確な指導法であると思われる。

「人間としての在り方生き方」の教育に必要と思われるものは、生徒一人一人が、自分の内面世界に十分根ざした形で学習を進め、深めていくような教育活動の場である必要がある。また、生徒一人一人の内面世界に揺さぶりを掛け、既成の固定した見方や考え方を崩して流動化させ、もう一度自分自身の力で新たに整理し再統合し直さざるをえなくするといった働きかけが必要となる。また、自分の内面世界を最終的に支えることのできるのは、自分において他にないということをよく理解して、自己形成を図ることである。

そして、生徒一人一人が、自分自身の内面世界の在り方に責任を持って、自分自身でそれをより一層望ましいものに成長させていくようになるための訓練が、「人間としての在り方生き方」の教育活動の中では大切である。そのために必要なのは、自分自身が理解しているところ、感じているところ、信じているところなどについて時に反省し、自己評価してみる習慣を持つことである。そのためにも、カウンセリング・マインドを生かした授業展開が、やがて来たる「人間として」が問われる21世紀の日本の教育には必要なのではと考える。

#### 【註】

- 1) 松原達哉「生活分析的カウンセリング(LAC法)」(1992)。LAC法とは、無気力な学生や生徒を対象に、自己の生活全体を詳細に反省、分析し、今後の生き方を考え、目的を持って意欲的に生活できるようにするカウンセリング技法。松原達哉が多年Student Apathyの学生のカウンセリングに従事し、開発した方法である。

- 2)山口正二, 土屋泰生, 藤本尚文「生徒と教師の心理的距離の変容に関する研究」『第28回日本カウンセリング学会発表論文集』(1995) 154頁。
- 3)「developmental counseling」の日本語訳。ドナルド, ブラックーなどの考えるカウンセリングで, 個人や集団の成長を促進する開発的な技法が用いられている。
- 4)ロジャーズ著, 伊東博訳『創造への教育』(岩崎学術出版社 1972) 154頁。学習を促進する質, 態度についての説明である。
- 5)ロジャーズ前掲書, 141頁。学習促進者である教師と生徒との対人関係についての説明である。